棚倉のお城

1 棚倉城跡（棚倉字城跡・国史跡）

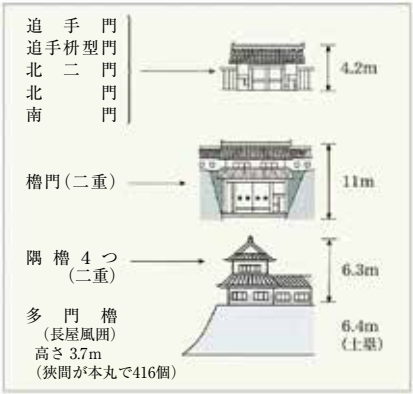
棚倉藩主丹羽長重は寛永元年（1624）、江戸幕府の命を受けて棚倉城を築城することとなりました。築城する場所は、多くの家臣が政務を行えるような大きな城を建設するのに充分な面積が得られ、また城の西側が急な丘になっており外敵から城を守るのに都合の良いこの地が選ばれました。その際、ここに建っていた近津明神（馬場都々古別神社）を現在の馬場に遷し、同２年（1625）より　築城を始めました。

以後、慶応４年（1868）に戊辰戦争の兵火で落城するまで、丹羽家、内藤家、太田家、越智松平家、小笠原家、井上家、松井松平家、阿部家といった諸大名が居城し、城主の替わること８家16代（244年間）に及びました。言い伝えでは、お堀に住む大亀が水面に浮かぶと決まってお殿様が他国へ国替えされたということから、別名「亀ヶ城」とも言われています。

棚倉城は御殿のある本丸と、それを囲む二ノ丸・三ノ丸から構成される輪郭式と呼ばれる構造のお城です。本丸の四方は、高さ約6.4ｍにも及ぶ巨大な土塁で囲まれ、その上には多門櫓と呼ばれる長大な建物や隅櫓（城の角に配置される櫓）を建て、厳重な防御を誇りました。また、本丸を守るも

う一つの要である堀は、幅約36m、本丸曲輪面から水面までの高さ約7.3m、水深は約3.8mと記録にあり、非常に規模が大きいものです。

門は、正門にあたる追手門や本丸に入る追手枡形門、新町側の北門、北二門などがありました。また長久寺の山門は、棚倉城の南門を宝永4年（1707）に当時の城主であった太田資晴が寄進したものと伝えられており、当時の城をうかがえる数少ない建物と言えます。



現在、本丸平場を囲む土塁の大部分と堀が残っており、土塁の上には南北朝時代の供養塔や棚倉城規模碑などがあります。また、城の南西部に残されている外堀跡には野面積みの石垣が約160mに渡って現存しており、昔をしのばせています。

棚倉城の名称いろいろ

丹羽長重は、棚倉城が完成しないまま白河へ移りました。城壁を白壁に仕上げられず荒土のままであったことから、当時は『新土城』と呼ばれていました。また、一説に棚倉の地名の起こりとされる「種倉」から詩人・墨客（書や絵を描く人）などはこれをもじり『穀城』としゃれて呼んでいたそうです。奥州一宮近津明神の旧社地の跡地に建てたので、『近津城』とも名づけられていました。

棚倉城跡の大ケヤキ（県指定天然記念物）

このケヤキは、棚倉城を築城する以前にこの地にあった、近津明神（馬場都々古別神社）の御神木だったとされる大樹です。棚倉藩主丹羽長重は、その形があまりにも優れていたため、そのまま残されたと伝えられています。

樹齢約600年、樹高約32m、幹回りは最大で10mにも及びます。また、二股に分かれた幹の根元には大きなコブがあり、長い年月を経てきた息吹を感じさせます。県内ではこれほど巨大なケヤキは稀で、県の指定天然記念物や緑の文化財（別項参照）に登録されています。

阿部正備茶室（町指定有形文化財）

棚倉城跡のすぐそばにあるこの茶室は、元白河藩主で、16代棚倉城主阿部正静と共に棚倉城に住んだといわれる阿部正備が愛用したものです。

広さ４畳半の片隅に水屋（茶事の用意を整えたり、使用後に茶器を洗ったりする場所）を設けた茶室で、特に周囲を竪羽目と呼ばれる、板を縦方向に並べる貼り方で作られた壁を採用した数少ない建築例とされています。

明治維新後に、古町地区の商家が譲り受けて自宅の屋敷に離れとして使われていましたが、現在は移築復元され町民の憩いの場として利用されています。

2　赤館城跡（棚倉字風呂ヶ沢）

赤館城跡は、町市街地北端の赤館山の山頂に位置する山城です。眼下には棚倉

町の市街地が広がり、遠くは久慈川沿いの町並が眺望できます。

古い記録によると、建武年間（1334～38）にはすでに赤館城が築かれていたことが分かります。築城当初の城主は不明ですが、文明年間（1469～87）には伊達氏の家臣赤館源七郎が在城しており、この頃から地域における有力な拠点として機能していたことがうかがえます。また、戦国時代には伊達氏や白河結城氏、芦名氏、佐竹氏による領地争いにより城主が目まぐるしく替わりました。慶長７年（1602）、城をおさえていた佐竹義宣が出羽国秋田（秋田県）に移ると、同11年(1606)に立花宗茂が入封し、赤館城にて棚倉藩の初代藩主となりました。後に棚倉城が築城され政治の拠点が平野部へと移ると、赤館城はその役目を終え、廃城となりました。

発掘調査では、長大な土塁や、最大で幅約10m、深さ約４mにも及ぶ堀が巡っていることが明らかになりました。

また、敷地内には紫衣事件で棚倉に配流された京都大徳寺の住職玉室宗珀が住まった庵跡の碑があります（別項「玉室宗珀」「小川芋銭」参照）。

3　寺山館跡（流字豊山）

流字豊山の中腹に数多くの平坦面（曲輪）や大規模な堀、土塁を構えた山城跡です。地名から別名蛇頭館とも言います。築城時期は不明ですが、白河結城氏によって築かれたものと言われており、元亀年間（1570～73）には白河結城氏の家臣深谷伊豆守治行と斑目能登守の両将がこの城を預かり、以

後約10年間治めていたとあります。永禄４年（1561）頃、常陸国より北上してきた佐竹氏との激しい戦闘の末に城を奪取され、以後は白河結城氏の要である赤館城を攻める前線基地としての役割を果たしました。

4　中丸館跡（板橋字日照田・福井字中丸）

中丸館は平地に築かれた室町時代の館跡です。「館」は、普段の領主の住まいのことで、戦時になると山城が使われました。文政元年（1818）に書かれた『白河古事考』によれば、田村氏の一族の仲丸左京太夫や白河結城氏の配下上遠野美濃守盛秀が居城したとあります。

館跡の内部は、空堀により一番平・二番平と呼ばれる、大きく２つの区画（曲輪）に分かれており、城主の住まいとなる建物があったと考えられます。また、周囲には空堀や土塁が残り、南西端には櫓の跡もみられます。

棚倉の神社

1　宇迦神社（棚倉字風呂ヶ沢）

伝説によるとその昔、白河国造である塩伊乃己自直命がこの地を拓くに当たり、穀物の神である倉稲魂命を祀ったことが起源とされています。以来、棚倉の鎮守として人々に親しまれてきました。

社殿の創建は神亀年間（724～729）、旧飯野